

♪ 2021年度 *poco a poco* ♪

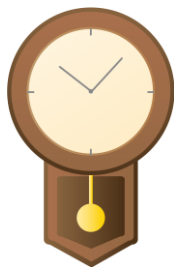
Nr. 22 2022年1月20日(木)

文責:プファイル・辰巳

## Die Zeit vergeht schnell....

ついこの間新年を迎えたと思ったら、もう半月以上が過ぎてしまいました。光陰矢の如し…。時の流れは速いですね。

日本は大雪が降ったり、津波が発生したり、新年早々災害に見舞われました。コロナ感染者数はドイツでも日本でも爆発的に増えており、こちらも心配の種です。心配し始めるとキリがありませんが、思わぬところで思わぬ事故や災害に遭遇はしたくないものです。今一度気を引き締めて、毎日の生活を充実させましょう。



## 音楽こぼれ話 <その時、作曲家は・・・ ②>

### J.S.Bach ~Capriccio~ BWV992>

「大バッハ」「音楽の父」などと呼ばれるドイツの大作曲家ヨハン・セバスティアン・バッハは、1685年アイゼナッハという町に生まれました。65年の生涯の中で作曲した曲は1000曲を超え、「G線上のアリア」や「トッカータとフーガ」など名前を挙げ始めると止めどなく有名な曲が出てくる作曲家です。

この膨大な作品の中から今回取り上げるのは、バッハの作品番号BWV922、鍵盤楽器のための“Capriccio”です。Capriccioは日本語では「奇想曲」「狂想曲」などと訳されます。原語はイタリア語で「気まぐれな」という意味があります。形式にしばられない、自由な性格を持つ曲ということになります。

バッハの作品番号は作曲された順番ではないので、992番ですが、バッハ18歳ごろの作品です。6曲の小品からなり、「最愛の兄の旅立ちに寄せて」という副題が付いています。ヨハン・セバスティアンはルター派の音楽一家に、8人兄弟の末っ子として生まれました。お父さんのアンブロジウスは早くに亡くなってしまったので、ヨハン・

セバスティアンは兄たちに育てられたようです。

その兄たちの中でも3歳年上で、年齢が近いこともあって仲の良かったヨハン・ヤーコプが、当時のプファルツ王朝の王であり、スウェーデン王でもあったカール12世と共に、故郷を後にすることになった時、その兄の旅立ちに寄せて作曲されたのがこのCapriccioであろうと言われています。

第1曲目のAriosoには、さらに「旅を思いとどませようとする友人たちの優しいことば」という副題がついています。出だしの数小節を聴いただけで、ホロリとするような優しさが感じられる曲です。ピアノの演奏を聴くのもよいのですが、古楽器チェンバロの演奏もお勧めです。

YouTubeでは「バッハと聴く宮沢賢治 ~ 雨ニモマケズ ~ 」というタイトルで、鈴木優人さんのチェンバロと石丸幹二さんの朗読のタイアップが聴けます。なかなかすてきな演奏と朗読ですよ。

さて、この曲を作曲したころまだ20歳前の青年だったヨハン・セバスティアン・バッハは、この後巨匠グスタフ・テューレンの演奏を聴くために、徒歩で北ドイツのリュウベックまで旅をします。それを最後に、バッハ自身はミュールハウゼン、ワイマール、ケーテン、ライプツィヒへと引っ越しは繰り返すものの、テューリングゲン地方から遠く離れることはありませんでした。終生の地はライプツィヒで、聖トーマス教会の楽長として65歳で世を去りました。墓碑はトーマス教会内に現在もあります。



## ほんのちょっとだけ 演奏会情報

フランクフルト市内のコロナ感染状況の悪化に伴い、アルテオーパーなどのコンサートの中止・延期が相次いでいます。情報は毎日のようにアップデートされますので、お出かけになる前に必ずチェックされることをお勧めします。

2月27日(日) アルテオーパー・大ホールにて

午前11時から フランクフルト・オペラ座オーケストラの演奏

リストのピアノ協奏曲、シェーンベルク「ペレアスとメリザンド」他